

主催

邦樂連合会

会

社団法人 義太夫協会

中央区築地一丁目十六番三F

電話三五四一—五四七一一番

清元古曲協会

新宿区西新宿六丁目三番三〇一

電話三四四五二一四〇五九番

財団法人 清常磐津協会

新宿区神楽坂六丁目二十七番

電話三二六〇一一八〇四番

内古曲協会

世田谷区岡本一丁目三十二一八

電話三七〇七一三七六三番

長唄協会

中央区銀座二丁目十九番

電話三五六八五十九九一六番

助成社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二丁目五十一四〇三

電話三五四二一六五六四番

(五十音順)

東京都歴史文化財団

財東京都歴史文化財団  
邦樂振興基金

CPRA(実演家著作隣接権センター)

平成二十二年五月二十日(土)

国立劇場小劇場

第一部 正午開演 三時三十分終演  
第二部 午後四時開演 七時三十分終演

2010都民芸術フェスティバル参加公演

第四十回 邦樂演奏会

四十回記念特別邦樂選

## 御 礼

本日は「第四十回邦楽演奏会」にお出かけくださいまして、まことにありがとうございました。出演者ならびに関係者一同、厚く御礼を申し上げます。何かと行き届きの点もございましたようが、お許し願いまして、どうかじゅつくりとお楽しみくださいますよう、お願い申し上げます。

この邦楽演奏会は、都民芸術フェスティバルの参加公演として、昭和四十六年以來毎年続

けて参りまして、今年で四十回目を迎えることができました。

東京には多くの種類の邦楽があり、それそれが独自の演奏活動を行つておりますが、七団体が一同に集まつての演奏会は、この邦楽演奏会だけでございます。といふので、毎年ご来場くださるファンの方もおられて、おかげさまでここまで続けて参りました。

今年は四十回という記念すべき演奏会なので、社団法人日本小唄連盟と日本琵琶樂協会のご賛同を得まして、特別にご参加をいただきました。両団体には厚く御礼を申し上げる次第です。またロビーには邦樂器に直接触れていただけるコーナーを設けました。樂器にも親しんでいただきこうと企画いたしましたものなので、どうぞお気軽にさわっていただきたり、ご質問などお寄せくださいるようにお願いいたします。

なお来年も同じくここ国立小劇場で、三月十九日(土)に開催する予定でございます。番組がきまり次第、ご案内をお送りいたしますので、ご希望の方は、はさみ込みのアンケート用紙に、おとといか、お名前をお書き込みの上、受付にお渡しください。また、今日お書きくださいましたご感想やご意見などもお寄せくださいまして、よりよい邦樂のためにご指導を賜りますよう、合わせてお願ひを申し上げます。

本日はありがとうございました。

第一部 番組（正午開演）

一、河東節 松竹梅

淨瑠璃 山彦音枝子  
山彦敦子  
彦恭子  
彦子

三味線 山彦千子  
山彦まさ子  
彦まさ子

二、長唄 狂獅子

同 嘴

杵屋直吉  
吉村辰三郎

三味線  
稀音家六四郎

三、新内

梅雨衣醉月情話（花井お梅）

淨瑠璃 富士松鶴千代

三味線 上調子  
新内仲之介

四、

常磐津

恩愛贖閑守（宗清）

三味線

淨瑠璃 常磐津松尾太夫  
常磐津清若太夫  
常磐津松重太夫  
常磐津松希太夫

常磐津常磐津英  
常磐津八百八寿  
文紫郎

五、小唄

春はる今こよ宵宵はは  
霞がすみ雨あめ  
(浮世うきよ)

唄唄蓼蓼

胡満佳胡満佳

替替糸糸

榮田榮田

村村

彌彌

利枝利枝

吉き三ち節せつ分ぶん

唄唄春竹春竹利昭利昭

糸糸

松峰松峰

照照

六、清元

月花月花茲友茲友鳥鳥  
(山姥やまんば)

淨瑠璃淨瑠璃清元清元若葉若葉

同同清元清元延正路延正路

三味線三味線

清清清清清清

延秀佳延秀佳

延古摩寿佳延古摩寿佳

延志寿佳延志寿佳

七、地歌曲きょくねねづづみみ

三弦替手三弦替手

同同

富富

山山

清清

江江

愁愁

光光

桃桃

仁仁

琴琴

三弦本手三弦本手

同同

富富

山山

清清

富紗野富紗野

富羽茉富羽茉

乃乃

清清

同同

富富

山山

清清

富志乃富志乃

富志乃富志乃

清清

江愁光江愁光

光光

桃桃

仁仁

琴琴

八、義太夫

関取せきとり千兩せんりょう幟のぼり

猪名川いながわ内うちの段だん

猪名川猪名川おとわ  
大坂屋大坂屋鉄ヶ嶽鉄ヶ嶽

澤澤津賀寿澤澤津賀寿

三味線三味線胡弓・細鶴胡弓・細鶴

第二部 番組（午後四時開演）

一、 筝曲編曲みだれ（高野和之編曲）

第一等	高野和之	塩田博	石川博	金子博	伊東	山手
第二等	小倉万和	岩下博	博佳英	詩苑	公和	博
十七弦	丸山博	明充	苑	榮	紫穂	手
三弦	泉博	三保	金子	和夕	和	博
尺八	小林博	久仁義	博	武田	則	
同	千佳子	武田	下	華		
淨瑠璃	久仁義	博	博	華		

二、 新内応挙の幽靈

三味線	鶴	鶴	鶴	鶴	鶴	鶴
上調子	賀	賀	賀	賀	賀	賀
同	邑代寿	邑代寿	邑代寿	邑代寿	邑代寿	邑代志寿
	也	也	也	也	也	

三、 義太夫

門 取 千 兩 暱  
 せきとりせんりょうのぼり  
 鶴 鶴 鶴 鶴 鶴 鶴 鶴 鶴  
 鶴澤澤駒寬也  
 賀 賀 賀 賀 賀 賀 賀 賀  
 賀榮治也  
 津賀花也

三味線

四、 常磐津

恨葛露濡衣  
 うらみくずつゆにぬれぎぬ  
 （久八意見）  
 きゅうはちいげん

常磐津

同	淨瑠璃
常磐津	常磐津
常磐津	文字太夫
常磐津	小文太夫
千寿太夫	千寿太夫

同	三味線
---	-----

常磐津	常磐津
常磐津	一寿郎
常磐津	絃寿郎
美寿郎	美寿郎

五、

琵琶

薩摩琵琶錦心流

川中島

山下晴楓

六、

清元

北州千歳寿(ほくしゅうせんねんのことぶき)  
(北州)

七、

宮菌節

小春治兵衛(こはるじへえ)  
炬燵の段(こたつだん)

淨瑠璃 宮 菌 千 碌  
同 同 菌 千 碌 司

三味線 宮 菌 千 加 寿  
同 同 菌 千 加 寿 弥

八、

長唄

勸かん

進じん

帳ちよ

同 同 同 唄  
杵 杵 和 和 歌 山 山  
屋 屋 山 山 富 富 司 司  
勝 三 富 富 司 司  
美 智 朗 朗 郎 郎

大立 小小笛 上調子 同 同 同 三味線  
鼓 鼓 鼓 鼓 同 同 同 三味線  
藤 藤 藤 藤 望 杵 杵 杵 杵 杵  
舍 舍 舍 舍 月 屋 屋 屋 屋  
円 華 清 呂 翔 五 五 弥 五  
秀 凤 成 凤 太 三 吉 之 三  
鳳 成 凤 太 次 吉 助 信 吉

\*出演者に変更のある場合もございますのでご了承ください。

(終演予定 午後七時三十分)

## 曲 目 解 説（演 奏 順）

（解説 竹 内 道 敬）

### 第一 部

松竹梅はめでたいものの代表として、芸能では古くからいろいろに作曲されている。松は常に緑の色を変えぬことと、姿が良いので喜ばれ、日本では相生の松が名高い。中国では秦の始皇帝が雨宿りをした時に、枝を伸ばして濡れるのを防いだので、松に太夫の位を授けたという。竹はまつすぐにのびてさわやかで、夏はその間を吹く風が涼しい。インドには釈迦にちなむ竹林精舎があり、中国では晉の時代に世塵を避けて七人の賢人が竹林で清談したという。梅はその匂いと形で喜ばれ、好文木の別名もある。日本では菅原道真が梅を愛したことで知られ、道真が太宰府に流された時、愛樹の梅が飛んで行つたという伝説がある。

別名を「老松」ともいうように、能の「老松」の文句をかなり大胆に借用しているが、中に廊の情緒を入れているので、めでたさの中に華やかさもあり、すぐれた祝儀曲になつていて、廊のことを加えるのは江戸時代中ごろの約束であった。

文政十年（一八二七）柳橋河内屋半次郎方で初演。十寸見東栄が東州と改めた名披露目の曲。文魯（伊勢屋平左衛門）作詞、山彦文次郎作曲。

### 二、狂獅子

文殊の淨土清涼山には、牡丹が咲き乱れ、蝶が舞い遊び、それに獅子がたわむれ遊んでいる。そこへは石橋を渡らなければ行くことはできない。その石橋は虹のように虚空にかかりていて、幅は一尺にも足りない。さらにその上には苔が一面にあるので、すべりやすい。悟りの境地に達した人でなければ、渡ることはできない。

ある春の日の庭で、梅が咲き、蝶が飛んでいる様子からその獅子を想像して待つうちに、牡丹の花に蝶がたわむれ、獅子が勇んで遊ぶ狂いを見るという内容。この趣向は「獅子もの」とか「石橋もの」という形で、邦楽や舞踊でさまざまに脚色されている。本曲もそのひとつ。

作者の名にちなんで「鳥羽屋獅子」ともいい、「曙獅子」ともいう。十八世紀半ばころに活躍した鳥羽屋三右衛門作曲と伝えるが、幕末から明治初年にかけて活躍した三世杵屋勘五郎（前名十一世杵屋六左衛門）が編曲ないしは復曲したものらしい。この曲は一上りを基本にして、調子替りがはげしいことと、特別な調弦法を使つていているのが特色。

なお作曲者の作品にはこのほか「臥猫」が伝えられている。

### 三、梅雨衣醉月情話（花井お梅）

明治二十年（一八八七）六月九日の夜、日本橋浜町醉月楼の女主人花井お梅が、番頭の峰吉を刺し殺した事件は、たいへんな評判になつた。お梅は子供の時分に養女に出され、苦労して

芸者になり、秀吉といつた。それが落ちぶれていた実父に出会い、やがて世話をする人があつて浜町に醉月楼という待合を手に入れたのだが、店の名義はその父親のものとなり、店の経営をめぐつて父親と意見が合わず、口論が絶えなかつた。また番頭の峰吉は昔から知つていた男で、失業していたのを拾つて醉月楼の番頭にしたのだが、せつかく助けてやつた峰吉が、父親の肩を持つのも気にはならない。それやこれやで峰吉を刺し殺してしまつた。お梅はその夜のうちに自首し、裁判の結果無期懲役の判決をうけたが、十六年後に恩赦で出獄した。

この殺人事件は世間の大評判になり、すぐに『東京絵入新聞』に「花井於梅醉月奇聞」という続き物が連載された。その小説から五世富士松加賀太夫が作曲したもので、明治二十一年三月に発表された。人気作品になり今日でもよく演奏される。伝統的な新内の節を巧みに使いながら、「もう十二時も過ぎた」とか「私の自由」などという明治らしい言葉が散見する。

なお五代目尾上菊五郎は、事件の翌月に中村座で「月梅薰臘夜」として花井お梅を演じて評判になつた。河竹黙阿弥作。そのほか「明治一代女」があり、歌謡曲にもとりあげられている。

#### 四、恩愛贖閨守（宗清）

平治二年（一一六〇）一月、源義朝が討たれたため、妻の常盤御前は、遺児の今若（七歳）乙若（五歳）牛若（二歳）をつれて都落ちし、一時は清水寺に逃れ、伯父を頼つて大和の国へ行く。しかし母親が捕らえられたことを聞いて出頭したと伝える。

この話をもとに脚色されたもので、義朝の子供は見つけ次第に首を討てという清盛の命令で、閑

を固める宗清。その制札のほかに「松を手折つて松を助ぐ」という重盛からの言葉を賜わつてゐる。大雪の中、子供三人を連れた女が通りかかる。女は常盤御前と見た宗清は、重盛の言葉の意味を考へて、子供のために操を破るように勧める。これはすべて夢の中の出来ごとであつたという筋。

文政十一年（一八二一八）十一月、江戸市村座初演。奈河本助作詞、五世岸沢式佐作曲。これは近松門左衛門作の「源氏烏帽子折」の第二段「宗清館の場」を書き替えたもので、この場が終ると鞍馬山になり、牛若丸が見た夢という趣向であつた。実際の常盤御前は近衛院の后九条院皇子の雑仕で、宮中第一の美女といわれた。十六歳の時義朝に嫁した。捕らえられたのち清盛に嫁して女子一人を生み、さらに藤原長成との間に男子一人を生んでいる。江戸時代の道徳観では「貞女二夫にまみえず」だつたから、このような脚色がなされたのである。

#### 五、小唄

明治末ごろから、演奏時間の短い小歌曲が流行するようになる。レコードの発達とともにいろいろな小唄が作られ（船頭小唄、祇園小唄など）たが、小唄という意味は確定していない。それがやがて整理されて「江戸小唄」にまとめられたのが今の小唄である。その中で歌舞伎や新派を題材にした「芝居小唄」が作られて人気を博した。吉田草紙庵が始めたとされるが、それまでの小唄と違つて前弾やオクリ（後奏）、さらには上調子や替手をつけたので、三味線にも楽しめる要素が加わつた。しかし短いが粹な氣分をあらわす曲も喜ばれ、さらには小唄以外の作曲家も参入して新作が多数作られ、戦後の一期には小唄全盛時代を迎えた。今日はそれ

らの中から春にちなんだ短い曲を二曲と芝居小唄を一曲きいていただく。

「今宵は雨」は江戸氣分に満ちた小唄。月が暁（傘）を着ている春の夜、首尾の松あたりにもやつた舟の中で語る一人。藤沢浅次郎作詞、新橋おかね作曲。

「春霞」は春霞とともに浮かれて旅に出る。ゆっくりと桜でも見に行こうか。久本露山作詞、吉田草紙庵作曲。

「吉三節分」は歌舞伎を題材にした芝居小唄。河竹黙阿弥作の「三人吉三」「巴白浪」は名刀庚申丸をめぐつて複雑なストーリーが展開するが、とくに人気が高いのが大川端の場。百両の金を手に入れたお嬢吉三が「月もおぼろに白魚の…」と名調子をきかせる。そして厄払いの声が聞こえたあと「ほんに今夜は節分か…」から「こいつあ春から、縁起がいいわえ」という名文句で終る。その場のせりふを巧みに編集して芝居の氣分をあらわした芝居小唄の傑作。昭和五年（一九三〇）田島断と岡野知十の作詞、吉田草紙庵作曲。

## 六、月花茲友鳥（山姥）

山姥はもともとは山中に棲む想像上の女性で、山の神またはそれに仕える女性だが、人を喰う残忍な鬼女あるいは老婆のイメージが強かつた。それが江戸時代初期になると、坂田金時の母として扱われるようになり、正徳二年（一七一二）に近松門左衛門が書いた「嫗山姥」ですつき性格が一変した。

坂田時行が遊女八重桐におぼれているうちに、時行の妹が親の敵を討つてしまう。それを恥じて時行は自害するが、その魂魄が八重桐の胎内に入つて八重桐は妊娠する。山姥となつた八

重桐は山中で子供を生み、怪童丸と名づけて育てるうち、源頼光に出会う。頼光は怪童丸を取り立てて坂田の金時と名乗らせ、金時は頼光四天王の一人となる。四天王のうち金時（金太郎）以外の渡辺綱、碓井貞光、ト部季武は、出身地や生没年が比較的あきらかなのに對して、金時には不明な点が多いこともあつて、このような伝説や作品が作られたのであろう。

この題材は常磐津、富本、清元に脚色され、歌舞伎舞踊としても人気があるが、頼光の家臣となつた怪童丸との別れに際して、山姥の八重桐が山めぐりをして消え去るところが山姥の見せどころとなつている。もと遊女であつた八重桐が、年をとつても色氣を失わずに、山めぐりをするところが今日は演奏される。

文政六年（一八二三）十一月、江戸市村座初演。二世桜田治助作詞、初世清元齋兵衛作曲。

## 七、曲ねずみ

江戸時代、上方といふのは他国から京坂をさす言葉であつた。したがつてそこでの唄は「上方唄」と呼ばれたが、上方では土地の歌という意味で「地歌」といつた。しかしこれは「舞の地（伴奏）の歌」の意味であるとも言われている。江戸での習慣で「地唄」の字が長い間使用されてきたが、これは「地歌」と書くのが正しく、近年はこの字を使用するようになつた。

地歌には多くの種類と作品があるが、その中に一連の滑稽な作品群がある。江戸時代の地歌の演奏家であつた検校たちが、たわむれに即興的に作ったもので、作詞・作曲者はわからない。これを「作もの」という。題材は酒の肴の青物と魚との争い（笑顔）、蛙が蛇に捕まるが、言

葉巧みにだまして難を逃れる（蛙）、鉄砲で撃ち殺されそうになつた狸が腹の子を口実にして助かる（狸）など、身近なものが多い。なかでも鼠は擬人的にいろいろと趣向を変えて取り上げられていて、もつとも古い代表曲が「荒れ鼠」。

その「荒れ鼠」の文句をアレンジして、三味線の技巧を發揮させたのがこの曲で、鼠の鳴き声を巧みに表現している。今日の演奏はたくさんの鼠（三味線）が出てくるので、十分にお楽しみただけることと思う。

## 八、閑取千両幟（猪名川内の段）

相撲取を主人公にした義太夫には「双蝶々廊日記」<sup>ふたつちょうろうじつき</sup>がある。この趣向を借りて、当時大坂で人気の高かつた稻川と千田川をモチーフにした九段にわたる長編の作品。たいへん複雑な筋だが、そのうちの一節目の通称「髪梳き」<sup>かみす</sup>だけがよく演奏される。実名をばかって稻川は岩川、猪名川と変わつたが、最近では稻川で演奏することもある。

彦根藩ご用をつとめる大坂の商人鶴屋淨久の息子礼三郎は、遊女の錦木に夢中になり、身請けの金に困つてゐる。そこへつけこんだのが彦根藩蔵屋敷の九平太とその一味で、礼三郎に賄金をつかませる。その結果礼三郎は親から勘当される。そこで淨久に恩をうけていた猪名川夫婦が、礼三郎と錦木を預かることになる。以上が伏線。

錦木の身請け金七百両のうち五百両は父の淨久に出してもらつたが、残りの二百両は猪名川が工面することになった。しかし金の都合はつかない。今日中に残金を渡さなければ錦木は九

平太に取られてしまう。その九平太の手先に鉄ヶ嶽といふ力士がいる。というところで、猪名川と鉄ヶ嶽は連れ立つて猪名川の家へやつてくるが、実は猪名川は昨夜恵海庵で、九平太をさんざんに痛めつけていたのである。鉄ヶ嶽が九平太の代わりに仕返しをしたところへ、二人が今日取り組むという知らせ。そこで錦木のことは俺次第、魚心あれば水心といつて八百長を匂わせて鉄ヶ嶽は帰つて行く。

猪名川は鉄ヶ嶽に勝ちを譲るつもりなのか、ほかになにか決心しているのか。おとわは夫の乱れた髪を結いながらのクドキになる。そして相撲に出かけた猪名川の跡を追つて、おとわが駆け出すまで。この曲によると当時大坂相撲では、相撲の取組はその日に発表されたものらしい。なお第二部の「櫓太鼓」（曲弾き）の解説も参照されたい。

明和四年（一七六七）八月、大坂竹本座初演。世話物、九段。近松半二ほかの合作。なおこの作品は、常磐津、新内にも脚色されている。

## 第二部

### 一、編曲みだれ

日本では古く弦楽器をすべて「こと」といった。あづまこと（和琴）、びわのこと（琵琶）など。極端な例ではさみせんのこと（三味線）、こきうのこと（胡弓）などといつてゐる。最近では柱を立てず、勘所を押さえて一弦多音のものを琴（一弦琴、大正琴など）とし、柱を立てて

一弦一音を原則とするものを「筝」としている。筝の字が常用漢字にないため、一般には筝と琴とは同じように使われている。

現在の日本では雅楽で使われる「樂箏」、一般に使われる「俗箏」と分けているが、ふつうは「おこと」である。江戸時代初期に基本の調弦や演奏法を確立させたのが八橋検校（一六一四～八五）で、わが国最初の芸術的歌曲である組歌や箏の独奏曲「六段の調」、「八段の調」、今日演奏される「みだれ」など、多くのすぐれた作品を作曲している。

箏曲は江戸時代には他のジャンルとの交流が少なく、主に盲人の演奏家が作曲や演奏活動を行ってきた。その発展にはすばらしいものがあり、家庭音楽ともなり、現代ではもつとも普及率が高い。楽器も十三弦のほか、近年では十七弦、二十弦（実際は二十一弦）、三十弦などの箏が考案されている。

「みだれ」は「乱れ輪舌」の略で、八橋検校作曲と伝えるが別の説もある。「六段の調」などは初段を除いて各段の拍子数がきまつてるので「段もの」というが、この曲はそれが一定していない（乱れている）のでこの名がついたものらしい。今日は高野和之師の編曲で、十七弦箏、三弦（箏曲では三味線をこういう）、尺八を加えた三曲合奏形式での演奏で、古典曲に新しい生命が吹き込まれることになった。

## 二、応挙の幽霊

新内節は富士松薩摩掾から始まるとして、延享二年（一七四五）。鶴賀若狭掾から始まるとする宝暦元年（一七五一）ということになる。初めは歌舞伎の舞台に出演していたのが、

やがて舞台を去る。そして寄席で人気を博し、流しという営業形態で喜ばれるようになるのは、およそ文化元年（一八〇四）以降になる。

新内節の古典作品は、市井の人情を一段でまとめた「端もの」（名作「明鳥」「蘭蝶」「伊太八」など）と、義太夫の一部を新内化して語る「段もの」（「佐倉宗吾郎」「かさね」「千両幟」など）、それに滑稽なチャリもの（「弥次喜多」三段など）にわけられる。明治以降も、第一部で演奏された「花井お梅」をはじめ、多くの新作が提供されてきた。

この「応挙の幽霊」もそうした新作のチャリものだが、同名の落語から鶴賀岳代寿師が作曲して昭和五十六年に発表した。その後にさらに工夫を加えて、平成四年には文化庁芸術祭に参加して、優秀賞を受賞した。戦後の新内の新作チャリものの受賞は初めて。舞踊、放送のほか、芝居立てで上演されるなど、人気が高い作品。新人の曲らしく、掛け軸から出た幽霊が、「蘭蝶」の「四谷で初めて」や「縁でこそあれ」を語ったり、都々逸を唄つたりする楽しい作品。

## 三、関取千両幟・櫓太鼓（曲弾き）

第一部で演奏された「関取千両幟」は通称「髪梳き」という場面で、あとが「相撲場」。いよいよ猪名川と鉄ヶ嶽が取り組み、猪名川が形勢不利になつた時、懸賞金二百両という声がかかる。それを聞いた猪名川は、鉄ヶ嶽を見事に倒して勝ち名乗りをあげたが、その二百両は、妻のおとわが身を売つた金であつた。この「相撲場」はほとんど演奏されないが、もとはそこへのツナギが始まつたのが「櫓太鼓」という演奏。

本来は舞台の道具が変わる間に「道具返し」として弾いたのであろう。相撲場の雰囲気を盛

り上げるために、櫓太鼓が遠くからきこえてきてやがて近づき、次第に相撲の取組になる。しかし道具返しの時間は長かつたり短かつたりするので、その間にアドリブを加えて弾いたらしい。最近では「ウチ上げ」という手で始まることが多いが、「櫓太鼓」にはきまつた約束はない。

三味線演奏の技巧が発達すると、腕の立つ人はどこかで発揮したくなる。長唄「二人椀久」「吉原雀」などでは「タマ」、地歌・箏曲では「洒落弾き」という即興演奏がある。義太夫ではバチのヒラキ（先の広がった部分）に約一センチほどの厚みがあるので、バチを三味線の棹の部分に立てることができる。これだけはほかの三味線ではできない。アドリブであり、遊びなので表だつてはあまり演奏されないが、寄席などでは余興のサービスとして喜ばれた。

見る要素の強い演奏なので、今日の演奏ではどのような曲弾きが見られるのか。五人の女流義太夫が、それぞれ違った曲弾きを見させてくれる。どうか見逃さないように注目していただきたい。四十回記念として、とくにお願いをした演奏です。

#### 四、恨葛露濡衣（久八意見）

河竹黙阿弥の書いた「勸善懲惡覗機関」（通称「村井長庵」）は、極悪非道な町医者村井長庵が主人公。すべて金欲しさのために、姪を吉原へ売り飛ばし、妹婿を殺し、その罪を患者になり付けて獄死させる。その上実の妹も手下に殺させる。黙阿弥はこの長庵と対照的な、実直な手代久八とを四世市川小団次に二役で演じさせるために書いた。講談の「大岡政談」によつたもので、黙阿弥自身ももつとも会心の作と考えていたらしい。

八幕十一場という長編の七幕目が常磐津のこの曲で、本名題は「恨葛露濡衣」。上下に分け

て上は「小夜衣」。質店伊勢屋の養子千太郎が吉原丁字屋の小夜衣（長庵の姪お梅）と心中しようとして、日本堤までやつてくるが、長庵の手下の早乗三次に小夜衣を連れ戻され、千太郎は腹を打たれて氣絶してしまう。今日演奏されるのがその後、下の「久八意見」。

その前に千太郎は、親元身請けをしてやるという長庵の言葉を信じて、質物の短刀を売つて五十両の金を作つたが、長庵に巻き上げられてしまう。しかもその跡に早乗三次が短刀を請け出しにきて、千太郎をゆするので、手代の久八はその罪を引き受け伊勢屋をやめ、今は紙屑買いとなつてている。久八は千太郎を立ち直らせて、家督相続をさせたいと苦心している忠義実直な人物である。それというのも千太郎を伊勢屋の養子に世話をしたからである。久八の熱意あふれる意見でも千太郎は死ぬ覚悟。争うはずみに久八は誤つて千太郎を殺してしまって。

河竹黙阿弥作詞、五世岸沢式佐作曲。文久二年（一八六二）閏八月、江戸守田座初演。

#### 五、薩摩琵琶錦心流 川中島

上杉謙信と武田信玄が戦つた歴史上有名な川中島の合戦は、史書によれば天文二十二年（一五五三）、同二十四年、弘治三年（一五五七）、永禄四年（一五六一）、同七年の五度行われ、中でも永禄四年のがもつとも激戦であつたといふ。ふつう川中島の合戦といえばこれをさしている。

このとき信玄の戦略を予想した謙信は、川中島に陣を構え、激しい戦いになつた。謙信が信玄の陣に駆け入つて信玄に斬りつけ、信玄が軍配団扇でこれを防いだというのはよく知られている。一時は有利と思われた謙信だつたが、信玄の逆襲にあい、謙信はついに退却した。両軍

合わせて死者六千五百余と伝える。

これを頼山陽の『日本外史』をもとにして、上杉側の立場で吉永経和が作詞、初代吉永錦翁が作曲したのが本曲。全体は変化に富み、聞きばえのする薩摩琵琶の名曲だが、今日は時間の都合で、その一部分の演奏になつた。戦いの場面で勇壮に演奏される琵琶の奏法は「クズレ」という。なお初めの文句「天文二十三年」とあるのは永禄四年が正しいが、これは武田信玄側に立つた『甲陽軍艦』によつたものらしい。

## 六、北州千歳寿（北　州）

北州とは江戸吉原のこと。慶長十七年（一六一一）江戸の遊女屋の主人たちは、庄司甚左衛門を代表者にして、幕府に遊里設置を陳情した。元和三年（一六一七）に許可され、翌年に今の中区日本橋人形町二、三十目付近に開業した。これが元吉原である。それが振袖火事（明暦三年＝一六五七）のあと、今の台東区千束四丁目あたりに移された。これを新吉原といつたが、ふつう吉原と言えばこの新吉原を指すことが多い。

吉原は男性の遊びの場所であつたが、江戸時代には一種の文化サロンであり、情報がうず巻く文化センターでもあつた。大名から大商人、地方の藩の江戸留守居役、通人などが出入りし、ここを舞台に歌舞伎、淨瑠璃の名作が生れ、黄表紙や洒落本などの小説や浮世絵など、さらには衣装や髪型の流行まで、江戸文化の発信地でもあつた。

しかし建物は木造であつたため、たびたび火事に見舞われた。とくに文化十三年（一八一六）

のそれは大火で吉原はほとんど全焼してしまつたが、二年後の文政元年（一八一八）に復興された。それを祝つて大田蜀山人が作詞し、川口のお直<sup>なま</sup>が作曲したのがこの曲。それに加えて初世清元延寿太夫が四十二歳の大厄に当たつたので、その厄払いの意も含めての曲となつた。内容は再建なつた吉原の四季のさまざまな年中行事を述べて、清元の繁栄を願うというもの。「梅の春」と並ぶ清元を代表する祝儀曲で、大切に扱われている名曲。

## 七、小春治兵衛　炬燵の段（こたつ）

妻も子もある紙屋の主人治兵衛は、曾根崎の遊女の小春と深い仲になり、このままでは心中しかねない。それと察した妻のおさんは、夫の命を助けるため、夫と別れてくれるようにと小春へ手紙を書いて頼む。小春はおさんの気持ちを汲んで、偽りの愛想づかしをして治兵衛と別れる。治兵衛が小春と別れたことを知つたおさんの父は、それを確認のために治兵衛に誓紙を書かせる。義父を送り出して、敷居を越すか越さぬうち、治兵衛は炬燵に入つて口惜し涙にくれるところからが今日の演奏で、おさんの恨みこと。

このあと、治兵衛の恋敵の太兵衛が小春を身請けすると聞いたおさんは、小春が死ぬに違いないと察し、女同士の義理が立たないと、治兵衛に眞実を打ち明け、小春を身請けさせようとするが、実父に連れ戻される。おさんの案じた通りその夜、小春と治兵衛は心中してしまう。近松門左衛門作の「心中天の網島」（享保五年＝一七二〇）の中の巻「炬燵の段」の後半から、宮園鸞鳳軒が安永二年（一七七三）ごろに作曲したもの。

## 八、勧進帳

平家討伐に功績をあげた源義経だつたが、兄頼朝と不和になり、厳しい追求を受けて二月十日の夜に京都をあとにし、昔育つた奥州の藤原秀衡の所へ行こうとする。武藏坊弁慶ほかわずかな家来たちは、山伏姿に変装し、ここ安宅の閑に通りかかる。頼朝の命令で新しく設けられた関所は、富樺左衛門が固めている。東大寺建立のために諸国を勧進して回るというが、見破られそうになると、往来手形を貼つた巻物を勧進帳（寄付を募る趣意書）といつて読み上げる。怪しみだ富樺との息づまる問答でいつたんは逃れたが、最後尾にいた強力姿の義経が見とがめられると、主君の義経を金剛杖で打つ。富樺はその苦心を察して通ることを許す。無事に逃れた義経は弁慶の機転を褒め、共に戦つた昔を語り合う。そこへ富樺が追つてきて酒を勧めるので、弁慶は感謝して飲み、豪快に舞を舞つて一行は奥州を目指す。

義経、弁慶たちが安宅の閑を通つたというのはフィクションだが、能の「安宅」がよく知られていて、それに一中節や半太夫節を取り入れてすばらしい舞台になつた。長唄は歌舞伎十八番の「勧進帳」の説明の音楽で、今日は長唄部分だけの演奏だが、話の筋は誰でも知つているのと、曲が名曲なのと、演奏曲として人気が高い。

天保十一年（一八四〇）三月、江戸河原崎座初演。三世並木五瓶作詞、四世杵屋六三郎作曲。初演時の配役は、弁慶（七世市川団十郎）、義経（八世団十郎）、富樺（市川九蔵）らであつた。